

## 【2004年度調査報告】

### 和歌山県東牟婁郡太地調査報告

(1)日程:2004年10月23日(土)~25日(月)

(2)調査参加者: 荒野泰典(立教大学教授)・蔵持重裕(立教大学教授)・弘末雅士(立教大学教授)・  
藤田明良(天理大学教授)・真栄平房昭(神戸女学院大学)・山浦清(立教大学教授)・  
渡辺憲司(立教大学教授)・西濱弘亮(三重大学大学院)・照沼麻衣子(立教大学大  
学院)

(3)調査報告:

10月23日(土)

羽田空港9時10分発、南紀白浜空港10時20分着。レンタカーでJR白浜駅へ向かい真栄平と合流、また、日置町の日置川付近で藤田と合流した。太地への道中、周参見町恋人岬の見晴らしのよい食堂で昼食をとる。

14時ころ、太地に着き次第、「太地くじら浜公園」内の「くじらの博物館」へ。まず、入場するとシロナガスクジラ、ナガスクジラ、マッコウクジラ、ザトウクジラなどの実物大の骨組みが展示しており、リアルな大きさを目の当たりにする。また、「紀州鯨譜」「鯨図巻」「鯨種類実形」「太地古式捕鯨船絵巻」、大阪の鯨油商人の描いたクジラの絵、などの近世の絵画資料が多数展示しており古来“クジラの町”であった太地町のありようを改めて感じた。また、クジラの胎児のホルモン漬け、鯨の糞である龍涎香、寛延五年の捕鯨船鑑札、などの展示からは、鯨に関する生態や文化や交通方法などが判り興味深かった。

15時過ぎ、「くじらの博物館」を出て西浜と合流。

現地の鯨関係史跡を訪れる。

#### 1. 太地漁港

古式捕鯨の時代から1897年(明治30)ごろまでの数百年間、熊野灘沿岸捕鯨の中心地であった港。

#### 2. 飛鳥神社

太地の氏神で1624年(寛永元)に新宮の阿須賀神社から勧請された。毎年10月14日に鯨の豊漁を祝う祭が開催されている。

#### 3. 順心寺

刺手組による漁法を始め太地捕鯨業の開祖といわれる和田頼元の位牌を安置し、後の墓地には和田氏累代の墓が並ぶ。また、二代目である太地頼盛が幼くしてなくなった娘の苦労のために建立した六地藏が残る。

#### 4. 恵比寿神社

井原西鶴『日本永代蔵』『天狗は家名風車』(1688刊行)に、泰地(太地)の妻子の歌っていた「横手節」

を聞きに来遊した際、恵比須の宮にあった鯨骨の大鳥居を見て驚いたことや、くじら捕り名人・天狗源内の活躍ぶりについてのことなどが記されており、この話にちなんで、文化財として復元した鯨骨鳥居が神社の前にある。漁業の神。ご神体は石。

#### 5. 漂流人記念碑

1817年（明治11）の捕鯨船漂流によってなくなった人々の供養碑。

灯明崎に向かうも夜の帳が下りてきてしまい断念。弘末と合流。

10月24日（日）

10時ころ、太地における捕鯨量を統括していた太地家の子孫である太地亮氏にお会いし、鯨関係史跡をご案内いただく。

#### 6. 古式捕鯨高塚連絡所跡

灯明崎と梶取崎との山見の相互の連絡をした場所。

#### 7. 金比羅神社

1798年（寛政10）に、太地覚右衛門頼徳が讃岐国の金毘羅神社より勧請した。船乗りたちの信仰を集める。鳥居付近に丸い約60センチメートルの石があり、地面に埋もれていた部分を探ると「八丈嶋」という文字が彫られていた。漂流した八丈島の猟師たちが奉納したものか。

#### 8. 灯明崎

1636年（寛永13）に、熊野灘を航行する千石船や漁船の標識として鯨油を使った行灯式灯台を設置して航海の安全をはかった。

##### ・古式捕鯨支度部屋跡

常に山旦那が控えていて炊事なども行われた。山見台に勤務する人達の支度部屋。

##### ・古式捕鯨灯明崎山見番所

沖の鯨を発見したり見張り船から鯨発見の信号を受けたりした場合、それを旦那に知らせてその指揮命令を受け、沖の船団と狼煙と旗で交信し、鯨を捕らせる任務をつかさどった場所。

##### ・古式捕鯨狼煙場跡

鯨を発見した際に狼煙を炊いた場所。

#### 9. 梶取崎

灯明崎と同様に、古式捕鯨狼煙場跡が梶取崎の突端にある。鯨を発見した際に狼煙を炊いた場所。

#### 10. 太地町なかの墓

「鯨漁切死（以下は、読み取りが不可能）」という文字を残す明治時代の墓石あり。捕鯨業に従事した太地の人々を偲ぶ。

#### 11. 蓮生禅寺

太地の中心地にある日蓮宗の寺。高台にあり、港を見渡せる。1768年（明和五）に古式捕鯨の従事者が建立した鯨供養碑がある。

史跡を巡った後、太地亮氏の所蔵する鯨関係文献を撮影させていただくために再び飛鳥神社へ。ちょうど鳥居誠史宮司が社内の整理をしているところであり、神社の所蔵する文書類、絵馬、鯨絵

などをも見せていただく。また、それらが未整理であったために写真を撮影し、後日に目録を作成することにする。その間、二手に分かれて6名は再び「くじらの博物館」へ。館員の方と明日の午前中に博物館蔵の資料を見せていただき目録を取らせていただくことを約束する。

10月25日（月）

蔵持・真栄平、9時ころに帰路につく。

残りの者は、9時から正午過ぎまで「くじらの博物館」を訪れ、資料の目録を取る。総合的な目録の作成は西濱が担当し、博物館にお渡しすることを約束した。

南紀白浜15時35分発で帰京。

（文責：照沼麻衣子）

・参考資料 — 捕鯨に関する太地の歴史年表（西濱弘亮氏作成） —

慶長11	1606	和田忠兵衛頼元、泉州堺伊右衛門、尾州師崎の伝次が捕鯨を始める
慶長19	1614	捕鯨が中断される
元和1	1615	伊右兵衛門が捕鯨を行う
元和3	1617	捕鯨が中断される
元和4	1618	和田金右衛門頼照が尾州知多半島小野浦から羽差の与宗次を雇い入れる
寛永13	1636	燈明崎に常明燈が設置される
寛文1	1661	太地浦で大火があり、太田庄大庄屋和田金右衛門頼興が負傷、弟角右衛門が大庄屋代となる
寛文2	1662	捕鯨を塗船とするなど鯨船が改良される
延宝5	1677	網取法が開発される 角右衛門が家督を相続する
延宝6	1678	鯨網の地下組ができる
延宝8	1680	浦々の鯨突組が紀州藩に申し入れて鯨網を止める
天和	1681	鯨網が許可される 土佐の多田吉左衛門に網取法を伝授する
貞享1	1684	肥前の深澤義太夫に網取法を伝授する
貞享年間		角右衛門頼治が太地姓を賜る
元禄7	1694	大漁のため鯨組が5組になる(角右衛門1・親類3・地下1)
元禄15	1702	紀州藩主(後の吉宗)が湯崎で捕鯨遊覧をする
元禄16	1703	親類が鯨組を中断する
宝暦7	1710	紀州藩主(後の吉宗)が湯崎で捕鯨遊覧をする。
正徳3	1713	親類と地下とが取り決めを交わし、鯨組が角右衛門組に一本化される
寛延4	1751	角右衛門頼(4代目)が没し、弟与一が大庄屋となる。須賀利浦へ金を貸し水主を差出される。
安永3	1774	角右衛門頼徳(5代目)が大庄屋となる。
寛政6	1794	紀州藩主が太地浦で捕鯨遊覧。頼徳が紀州藩代々勘定奉行直支配士熨斗目着用御免となる。
寛政11	1799	与市頼庸が大庄屋となる。高遠藩士、軍略砲術家坂本天山が太地へ来る

寛政12	1800	太地鯨方、紀州藩の御手組となる
文化1	1804	和田孫才治頼孝が大庄屋となる。
文政9	1826	三輪崎鯨方が紀州藩の御手組となり、太地鯨方と一つになる
弘化3	1846	角右衛門頼在、紀州藩から捕鯨業の返還を受ける
安政1	1854	地震津波により甚大な被害を被る
文久2	1862	太地鯨方新宮領御手組となる。山本源左衛門が太田組大庄屋、鯨方頭取となる。
慶応1	1865	角右衛門頼成が太田組大庄屋となる
明治4	1871	角吾（角右衛門頼成）、捕鯨業の返還を受ける
明治6	1873	大阪の小野善助と一万五千円の借入契約を交わすも、倒産のため破談となる
明治8	1875	捕鯨業を細井八左に譲渡する
明治11	1878	角吾、鈴木伊平と共同で捕鯨業を還付する。鯨船漂流事故のため羽差、水主等108名が死亡
明治13	1880	捕鯨を休業する
明治17	1884	和田与六等が捕鯨を行う
明治19	1886	日本水産会社が出資、鯨組が2組となる
明治22	1889	捕鯨を休業する
明治23	1890	平松与一郎が捕鯨を行う
明治25	1892	捕鯨を休業する
明治31	1898	新宮の尾崎作次郎、中谷利一郎、植松新十郎等が熊野捕鯨会社を設立し、捕鯨業を開始する
明治33	1900	ノルウェー式の捕鯨事業を開始し、網取法が廃止される